

平成22年度研究開発実施報告書（要約）

1. 研究開発課題

小学校における「公共性」を育む「シティズンシップ教育」の内容・方法の研究開発

2. 研究の概要

本校の「シティズンシップ教育」は学習において「公共性」を育む授業改善の取り組みである。本校で定義する「公共性」とは、「子ども達が友だちと自分の違いを排除せず、理解し考える力を発揮すること」であり、そのためには教師自身が民主主義に基づく社会生活を創る資質・能力を探究し育成する視点と力量をもつことが必要とされる。子ども達に授業（学習）を通して育てる資質能力が「公共性リテラシー」である。「公共性リテラシー」は全学習分野において育成する。教育課程は「学習分野」と「創造活動」で編成し、当開発では「学習分野」研究に焦点を当てる。教育課程運用には協力学年担任制と学習分野担任制を併用する。「公共性リテラシー」を育む教育課程の内容は『学習における「公共性」育成プラン』にまとめ、合わせて校内研究を教師の学びとして持続可能なものにするために授業研究のあり方を改善し提案する。

3. 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

① どのような手段を考えているのか

ア 協力学年担任制

個々の教師が他の教師と協力して子どもを育てるという考え方から「協力学年担任制」を採用する。

イ 学習分野担任制

全ての教科（学習分野）で「公共性」を育むことをねらい、目の前の子どもの実態から教育内容や方法の研究を具体的に進めるために、「学習分野担任制」を採用する。「協力学年担任制」で安定の基盤をつくった上に教師の専門性を生かして子どもを育てるという考え方である。

ウ 各学習分野で『学習における「公共性」育成プラン』を作成する

全ての学習分野において、「公共性」育成に資する教育内容や適切な方法を抽出し、本校オリジナルの『学習における「公共性」プラン』を作成する。その中で、学習分野で育む「公共性リテラシー」を明らかにする。

エ 「公共性」を高める校内研究体制を構築する

【授業者が学習指導案を考える ⇒ 校内授業研究会 ⇒ 実践記録を授業者が書く ⇒ グループで読みあい省察する ⇒ 各自の授業改善に活かす（実践者は記録を書き直す）】という専門職としての教師の対話的な校内研究サイクルを確立する。

② どのような成果を期待しているのか

ア 協力学年担任制

複数の担任教師が一人ひとりの子どもに学習指導と生活指導で関わることによって、子ども側は多面的な見方や価値観にふれることができ、よりどころを得て精神的な安定感につながる。様々な教師の人間性や指導法に触れて異なる価値観や意見に出会い、いろいろな立場で考える機会が増えるので「公共性」を育むことへ促進的に働く。

教師の側からすれば、「公共性」育成を異分野の視点で考えるチャンスが増え、個々の教師が経験的

に把握している実践上の知見に多様な視点が加味され、各自の実践を工夫し改善することにつながる。

イ 学習分野担任制

教師の専門性を生かすことができるので、学習内容や方法の研究が進む。授業に工夫を加えて、子ども同士が関わりあいながら創造的、専門的に学ぶ機会が増える。また、各学習分野研究が活発になり、「公共性リテラシー」についての議論が進む。

ウ 各学習分野で『学習における「公共性」育成プラン』を作成する

「公共性リテラシー」を6年間の教育課程全体の視野から整理することができるので、当該学習分野で計画的かつ省察を加えながらの実践を行うことができる。

エ 「公共性」を高める校内研究体制を構築する

教師個人では気づけなかった子ども同士の関係の変化や子どもの学びのよみとり方を知ることができる。「公共性」や「公共性リテラシー」に関して、他の教師の考えを受けとめて共感的・批判的に試行錯誤することができる。そのことによって、自らの実践に工夫を加え続けようとする意欲が高まる。

(2) 教育課程の特例

教育課程を、「学習分野」（ことば・市民・算数・自然・音楽・アート・生活文化・からだ・なかま）と「創造活動」で編成する。

4. 研究内容

(1) 教育課程の内容

① 開発する教育課程の目標…「公共性」を創る

前回の研究開発（H17～H19）で図1にあるとおり、協働して学び生み出す子どもを育てる3つの視点のひとつに「公共性」があることを提案した。

今回（H20～H22）は、特に「公共性」に焦点を当てて、小学校教育課程で育成できることは何か、教科（学習分野）で必要な内容・方法を開発した。その際、教師自身の授業改善を基盤として研究を進めた。

研究の動機は昨今の児童の実態や、子どもを

取り巻く現状社会の文化や価値のおき方、学校教育が担うべきこと、教師たち自身が創る教育課程のあり方などへの問題意識である。例えば、主張はするが他者の声を受け止められない、白か黒か決着をつけたがる、権威に弱いなどの実態が見られる。これは現代っ子の一面であろう。ここからは学習の場において、関わりあいの質を丁寧に問い直し、現代社会の複雑で多様な問題から目をそらさずよく考え判断する子を育てる、という教育課題が見いだせる。そこで本校では3年間の研究課題として「公共性＝友だちと自分の違いを排除せずに理解し考える」を取り上げたのである。

また、一方で、近年のシティズンシップ教育の潮流の中で、本校の教育課程の特色を明確にする必要がある。シティズンシップ教育とは、学校教育と社会教育の境界を越えて多様な可能性をもつ研究領域である。私たちは国内外の先進的な取り組みを参考にしつつ本校の開発で担うべきことを探った。

シティズンシップの定義については、『シティズンシップ教育宣言』（経済産業省2006「シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会」編）にある「多様な価値観や文化で構成される社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという

（図1 2009 第71回教育実際指導研究会発表要項 P11）
協働して学びを生み出す子ども（定義）

